

ムードルを利用しての授業改善

「キッズイングリッシュ&ストーリーテリング」での活用報告

小玉 容子 ラング クリス
(総合文化学科)

Using Moodle for Course Improvement: Case Study Report on 'Kids' English & Storytelling'

Yoko KODAMA, Kriss LANGE

キーワード：ムードル moodle FD Faculty Development

はじめに

本稿は「キッズイングリッシュ&ストーリーテリング」の授業におけるムードル(Moodle)活用に関する報告である。ムードルとはインターネット上に授業用のウェブページを作るための、無償で使用できるソフトウェアである(<http://docs.moodle.org/ja>参照)。授業の目標を達成するため、どのようにムードルを利用したか、利用に際しての問題点は何であったかなどを明らかにすることで、今後、当該授業の改善に役立てていくとともに、英語教育活動全般の改善に資することを目的としている。

授業の概要(内容と目標など)

当該科目は幼児・児童英語教育のための教材研究と教材作成および実践に向けての学生の総合的英語力の向上、特に音声面の強化を目標としている。教材研究では歌、ゲーム、そしてストーリーテリングを必修項目とした。平成20年度前期、総合文化学科英語文化系および文化資源学系2年生対象の専門科目で、担当者は小玉容子、クリス・ラングの2名、受講

生は37名であった。使用教室は一般講義室で、教室設備はテレビ・ビデオのみである。音声教材に関してはCD・MDプレーヤーを利用し、ストーリーテリングはラングがモデルリーディングを示すこととした。

幼児・児童英語教育において時に学生の誤解が生じる点は、扱う内容に合わせた英語力さえあれば良いと考えることにある。教える立場に立つためには十分な総合的英語力が必要であり、特に音声面を重視して向上させなければならない、という点は常に強調する必要がある。ストーリーテリングは幼児・児童向け英語教育教材の一部として取り上げているが、学生の総合的英語力を高めるための教材としての位置づけもしている。すなわち、ストーリーテリングを通して、学生の聞く力、話す力の向上、文法の正確な理解、そして物語の理解力、表現力の向上を目指した。

英語でのストーリーテリングの基本はストーリーを覚えて語ることだが、正確に覚えることに加え、正しい発音、子どもたちを引きつける表現力の豊かさ

も求められる。授業で扱ったストーリーは、"Three Little Pigs"、"Little Red Riding Hood" そして "The Happy Prince" (The Happy Prince and Other Stories, Ladybird Books Ltd. のリトールド版より) の3作品だったが、これらはプリントを配布して「読み」からスタートした。しかし一般教室での「読み」の練習では反復練習に割ける時間に限度があり、また一人一人の学生の必要とする練習に対応するにも十分な時間を割くことが難しかった。プレゼンテーションの方法を考え、個人の達成度を知るための発表までの時間も必要である。このような状況の中で、学生が自分のペースで音声面の力の向上を目指すことができる支援システムとしてムードルを利用し、ディクテーション、リーディング(レコーディングを含む)を課題とした。

・ムードルの利用方法・課題内容

1) システムについて

島根県立大学浜田キャンパスで既に立ち上げられているサーバーのムードルサイトの利用許可を得て実施した。ラングは授業コースを作成、追加できるコース管理者の役割をシステム管理者より与えられ、ムードルサイト North East Asians' English Space の Matsue Campus (コースカテゴリ) に「Kids' English & Storytelling」の授業コースを設けた。コース管理者はこのように授業コースを作成でき、コース作成者は作成されたコースの中身を作成していく授業担当者である。科目登録者の情報(英語氏名、学籍番号、e-mailアドレス)をシステム管理者に送り、IDとパスワードを割り当ててもらった。学生はそのIDとパスワードでログインをし、初回に登録キー(Enrolment key)を入力し、当該科目にアクセスして課題を行うことになる。

ここでの問題点として、浜田キャンパスのムードルサーバーには松江キャンパス総合文化学科の学生情報が登録されていないため、浜田キャンパスの管理者に科目ごとの登録を依頼しなければならなかったことである。サーバーに全学生の登録がしてあれば、松江キャンパスのコース作成者が自ら授業の名簿作りができるのだが、今回は追加登録や登録削除

など、その都度管理者に依頼しなければならなかった。全てを1人のシステム管理者が引き受けなくてもよいように、また連絡などの煩雑さを少しでも省けるように、サーバーにすべての受講可能者名簿が登録されていることが望ましい。(注：H20年11月末までに学生登録が行なわれることになった。)

2) 学生への課題提供と回収

平成20年度前期の授業だったため、授業は4月からスタートしていたが、学生の状況を見ながらムードル利用を決めるまで、そしてどのように利用するか担当者間の話し合いや登録などの準備にも時間がかかり、実際のムードル利用は第9週目からの6週間であった。

課題内容はディクテーションとリーディング=レコーディングとした。事前に学生のパソコン環境を調べると、自宅でパソコンが使用できる(インターネットアクセスが可能な)学生が40%ほどしかいなかった。しかし、学内のパソコン利用を前提にスタートした。

授業で扱う予定であったストーリーはペーパーベースでの扱いとしていたため、学生の手元には既にストーリー全文があった。そこで課題ストーリーは“The Happy Prince”と同レヴェルの“The Snow Queen”(Ladybird Books Ltd.)を用いた。課題1回分の長さは250語程度(ナチュラルスピードでおよそ2分)を目指したが、内容の切れ目を重視したため語数には幅がある。課題提供から回収までのプロセスは；1)担当者が課題音声をアップロードし、学生はディクテーションを行い提出する。2)締め切り日時を過ぎてから担当者はオリジナルテキストと次のセクションの音声をアップロードする。3)学生はオリジナル英文で自分のディクテーションをチェックし、そのセクションを読み、レコーディングし、提出する。4)次のセクションのディクテーションを行い提出する。2回目以降のディクテーションでは、前のセクションのテキストを既に読んでいるので、学生は内容のある程度推測でき、音声にも慣れていくので、より正確なディクテーションができると想定し、このサイクルで6週間実施した。

3) 学生のムードル利用のプロセス

(1) ムードルサイトにアクセスする (<http://lms.u-shimane.ac.jp/moodle/>: 図1)。



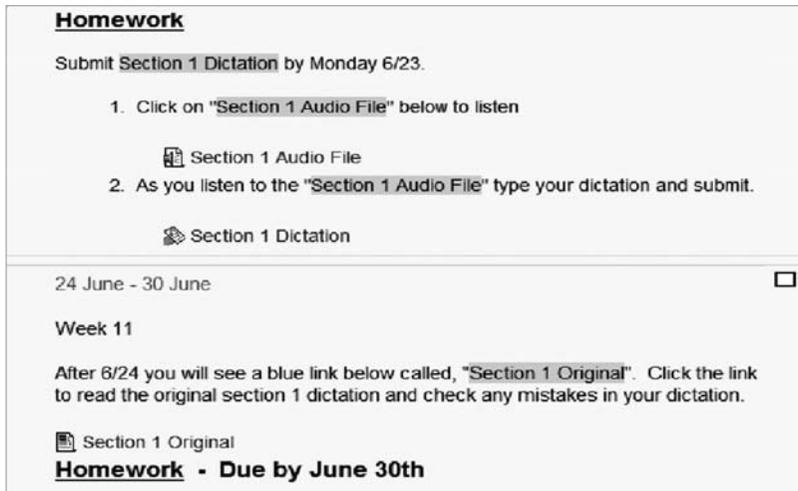
(図1)

- (2) ユーザー名とパスワードを入力しログインする。
- (3) メインページ、コースカテゴリの“Matsue Campus” (図1の最後の行を参照)をクリックし、次のページのコースリストの“Kid's English and Storytelling (Kodama and Lange)”をクリックする。
- (4) コース登録キーの入力が求められるので、授業で与えられた登録キーを入力する。これは初回のみである。コースメインページが開かれる(図2)。



(図2)

- (5) このページで各週の授業内容や課題などをチェックする。課題はオーディオファイルで与えられている(図3)。



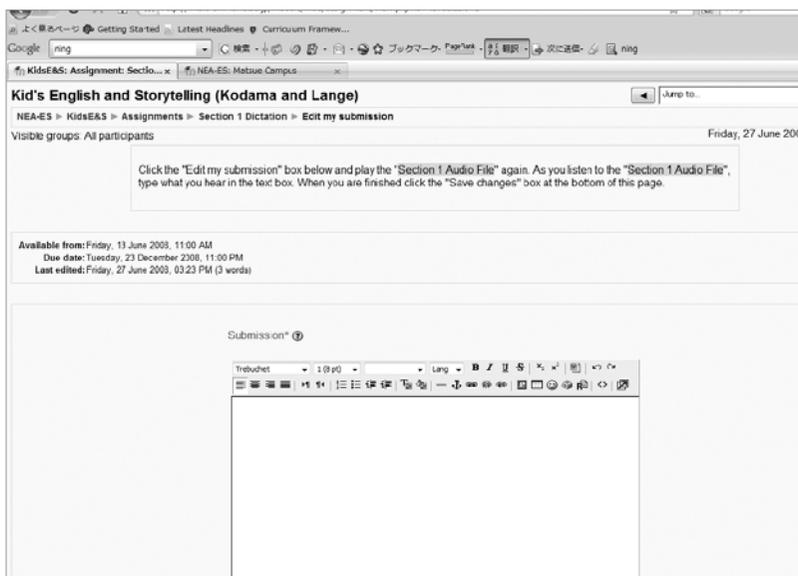
(図3)

- (6) Section 1 Audio File (Homework 1.) をクリックしオーディオファイルを開く(図4)。



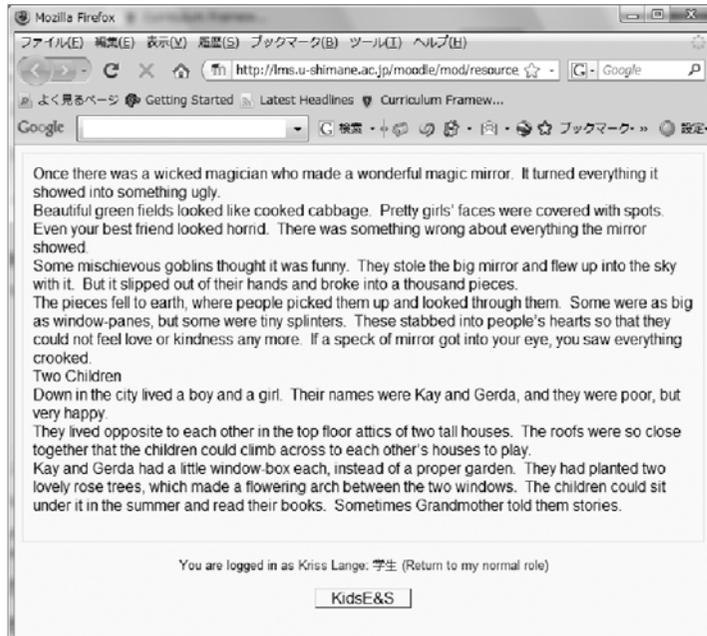
(図4)

- (7) ディクテーションの提出は、手書きではなく、オンラインで行う。Section 1 Dictation (Homework 2.) をクリックすると、課題提出編集画面になる(図5)。オーディオファイルと課題提出編集画面両方をモニター上に並べて、ディクテーションを行う。



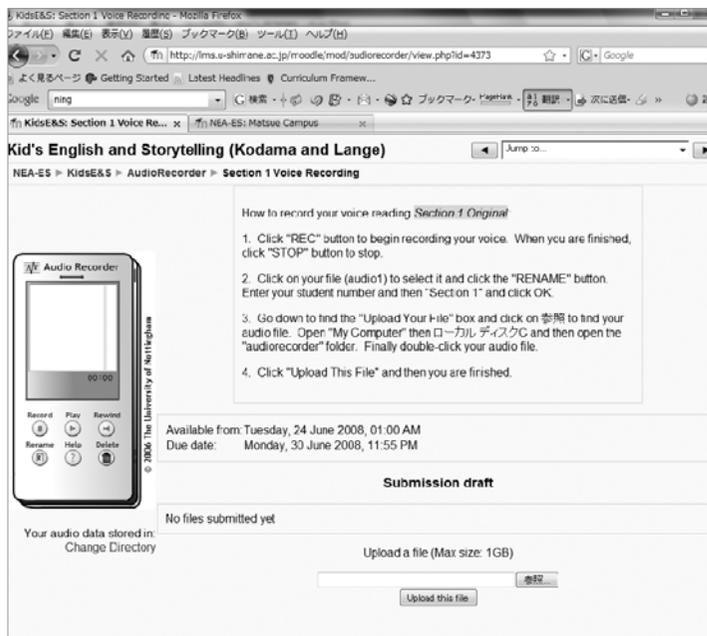
(図5)

- (8) ディクテーションの提出締め切り後に原文がアップロードされるので(図6)、メインページ各週のメニューの Section 1 Original(図3参照)をクリックして自分のディクテーションをチェックする。



(図6)

- (9) オリジナルテキストを読み、自分の声を録音し、オーディオファイルに保存する。このオーディオファイルのタイトル名を自分の学生番号にしてハードドライブに保存する。提出前の自分の読みをチェックし繰り返し録音できる。最後にこのオーディオファイルを呼び出し、ムードルのサイトに提出する(図7)。



(図7)

4) 課題提出状況

ディクテーションの課題提出状況は、担当者がコースメイン画面(図2)の左側“Activities”の“Assignments”をクリックすると、下の画面に移動しチェックができる(図8)。

Week	Name	Assignment type	Due date	Submitted	Grade
10	Dictation Sample	Online text	Tuesday, 17 June 2008, 12:00 PM	View 35 submitted assignments	-
	Section 1 Dictation	Online text	Tuesday, 23 December 2008, 11:00 PM	View 30 submitted assignments	0.00
11	Section 2 Dictation	Online text	Monday, 30 June 2008, 11:55 PM	View 30 submitted assignments	0.00
12	Section 3 Dictation	Online text	Friday, 11 July 2008, 10:00 AM	View 18 submitted assignments	0.00
13	Section 4 Dictation	Online text	Tuesday, 15 July 2008, 11:55 PM	View 26 submitted assignments	0.00
14	Section 5 Dictation	Online text	Tuesday, 22 July 2008, 11:55 PM	View 23 submitted assignments	0.00
15	Section 6 Dictation	Online text	Tuesday, 29 July 2008, 11:55 PM	View 10 submitted assignments	-

(図8)

レコーディング提出状況も、同様に“Activities”の“Audio Recorder”をクリックすると図8と同じタイプの表に移り、提出状況が示される(図9)。提出した録音を聞くには“View # submitted audio files”をクリックし、個人個人の録音を聞くことができる。このような提出状況のチェックは担当者のみができる。

Week	Name	Due date	Submitted	Grade
4	Audio Recorder	Friday, 2 May 2008, 10:05 AM	View 2 submitted audio files	-
10	Happi Prince Sample Voice Recording	Tuesday, 17 June 2008, 07:00 PM	View 34 submitted audio files	-
11	Section 1 Voice Recording	Monday, 30 June 2008, 11:55 PM	View 27 submitted audio files	-
12	Section 2 Voice Recording	Friday, 11 July 2008, 11:55 PM	View 14 submitted audio files	-
13	Section 3 Voice Recording	Monday, 14 July 2008, 11:55 PM	View C submitted audio files	-
14	Section 4 Voice Recording	Monday, 21 July 2008, 01:55 PM	View C submitted audio files	-
15	Section 5 Voice Recording	Monday, 28 July 2008, 02:00 PM	View C submitted audio files	-

(図9)

オーディオファイルは、記録ではセクション1(11週目)で27名が、セクション2(12週目)で14名が提出したことになるが、実際に録音できていた学生はそれぞれ21名と9名であった。

練習ではほぼ全員が録音できたが、以下の理由で課題を実施する環境が整っていなかったため、3回目以降はオプション課題とした。

操作や音量の設定など、ディクテーションに比べ提出が複雑である。

録音され提出された音声を担当教員がチェックする時、聞き取れないものが多かった。

録音できるパソコンはマルチメディア演習室のみであり、この部屋が授業で使用されていない時は多くの学生が様々な課題を行って

いる。この部屋でマイクを使用して大きな声で読みを行うことが難しい。

オプション課題とした結果、提出する学生はゼロになってしまったが、このような課題のためにはまず環境の整備が必要である。

ディクテーションも、後に行ったアンケートの回答を見ると、ほぼ全員がマルチメディア演習室を利用していた。提出状況は Section 1 (241 words, 2 : 01)30名、Section 2 (297 words, 2 : 20)30名、Section 3 (197 words, 1 : 30)18名、Section 4 (264 words, 2 : 05)26名、Section 5 (303 words, 2 : 57)23名。Section 6 はアップロードしたが、締め切りが前期試験期間中になったため、課題からは除外した。提出率50% 1回、62% 1回、70% 1回、81% 2回だった。パン

コンでのアンケート回収率が非常に悪くなる傾向、そしてパソコン設置環境などを考慮に入れると、学生の取り組みは評価できる。成績に占める割合などを明示したり、課題実施が授業と直結するような課題内容にしたりすることで、回収率をさらに上げることができるだろう。

2分近くナチュラルスピードで話される物語を聞き取ることは時間のかかる作業であり、また入力に慣れていない学生には入力自体が大変な作業なので、受講生には最低30分程度という時間を決めて出来たところまでの提出でよい旨を伝えていた。実際は2時間以上かかった、という声も多く聞こえてきた。ファイルを開いていた時間も記録されるが、その時間ずっと席を立たずにディクテーションに取り組んだかどうかは分からないので信頼度の低い記録であり、今回のレポートには入れないこととした。

提出されたディクテーションの達成度に関しては、どの程度の時間を費やして取り組んだかとの関連もあるが、平均して90%以上の語数を書き込んでいる学生が約4.5割、80%以上が約2割、70%以上が約1割、中間層が薄く、50%以下は約2.5割であった。

5) アンケート

ムードルを利用して課題を行うことに関するアンケートを実施した。(実施日：10月14日～20日、回収率70%、一部割愛)

問1 ログインおよび課題へのアクセスなど、操作性は如何でしたか。

問5 ディクテーションは何処で行いましたか。

問8 ムードルを利用した英語課題実施の利点は何でしたか。

問9 ムードルを利用した英語課題実施の難点は何でしたか。

問10 インターネットを利用しての英語学習が今後ますます進むと思いますが、学習者の立場からの意見を聞かせてください。

問1のログインに関しては「やや難しい」と答えた学生は46%いたが、「簡単」と答えた学生も33%で、それほど問題は無かったと考える。ディクテーションおよび入力になると、「やや難しい」が38%、「難しい」が58%と、9割を超える学生が難しいと感じていた。これは単に操作性に関してだけでなく、課題内容に関する反応も入っているだろうが、担当者が考えているより、英語を入力すること自体が学生にとって不慣れで難しかったようだ。レコーディングについても数名の揺れはあるが「やや難しい」「難しい」と答えた学生が同様に9割を超えていた。

問5の課題実施場所は、5名は複数回答で自宅を入れていたが、全員がマルチメディア演習室と答えていた。特に、録音の課題を行うために必要なヘッドセットまでそろえている家庭(アパート)は少ないようである。

問8、問9の利点、難点については特徴的な回答を以下に挙げる。

- 利点・いつでも宿題をチェックでき、時間があるときにできる。
- ・自宅でもでき、ペーパーの提出がない点。
 - ・パソコンの練習にもなった。
 - ・普段あまりしないレコーディングができ、自分の声を聞き直せた。
 - ・リスニング、書き取り、リーディング等いろいろな勉強ができ、文法の勉強にもなった。
- 難点・パソコンが必要で、できる場所に限られる。
- ・マイクが家がないので自宅ではできない。
 - ・操作(入力、録音含む)が難しい。使い方がなれるまで大変。
 - ・(内容について)難しすぎる。時間がかかりすぎる。

問10は、問8、9との関連で答えた学生が多いが、パソコンを利用して課題を行うことに関する回答を以下に挙げる：

- ・操作方法の練習が1回では覚えられず、使い方に慣れるまで時間がかかる。
- ・操作の開始に時間がかかる(すぐに取りかかれず、サイトにアクセスしないといけなないのでサ

ボリがちになる)。

- ・場所が限定されるので、良い環境が必要。
- ・パソコンでの学習は、勉強した気になれない。頭に入りにくい。
- *操作が簡単なら、ネットは場所を選ばないので良い。
- *インターネットでの学習は楽しい。
- *まだ慣れないけどパソコン利用は必要。

6) まとめ

今回の Moodle 利用は授業がかなり進んでからの開始だったので、学生が操作に慣れるまで、またパソコンを使って今回のような課題をこなすことに慣れるまでの時間が十分ではなかった。課題を行うことが総合的英語力の向上に有効であったかなど、その効果の検証も必要である。今後、ディクテーションやリーディングに関して、第一回目の記録、中間の記録、そして最終の記録などをとり、学生がその変化を確認できるようにすることが重要になるだろう。

ディクテーション課題そのものが難しすぎたという感想が多かったが、課題内容の量や難易度を十分に検討する必要もある。学生の習熟度の幅が大きいという点を考慮し、スピードの異なる音声提供も考えられるだろうが、学生の自主学習の環境整備や、提供教材の加工・工夫は、平成21年度から利用開始の CALL 教室を待つことにする。

「キッズイングリッシュ&ストーリーテリング」の授業では、平成20年10月の大学祭で同じタイトルのイベントを開催し、子供向け英語教育の実践を行った。授業でも、声を出すこと、特に人の前でも恥ずかしがらずに大きな声で英語を話すことを奨励してきたが、実際に人前で英語を話す機会が少ない日本の英語学習者にとっては良い機会となった。学生は自主的に準備をしていた。教える立場に立つ者が持つべき責任感を感じ、自分の発する英語に責任を持つ

という意識が、自主的な準備や練習のよい動機付けとなっていた。実践に向けての総合的英語力向上を目指しているという授業目的を学生に意識させることで、パソコンを前にした学習に対する意欲を一層高めることができるだろう。

Moodle は学習支援を提供する手段としては有効なツールであり、利用方法の工夫によりその有効度を向上させることができると考える。今回の Moodle 利用は、パソコンでの学習に対する学生の取り組み具合やその姿勢の現状を知ることができ、今後の授業改善に ICT を活用する第一歩としての結果を確認できるものとなった。今後、本学学生の総合的英語力の向上と、大学で提供する授業の質の保証に役立てていきたい。

参考文献

- 井上博樹他 『Moodle入門：オープンソースで構築するeラーニングシステム』(海文堂、2006年9月25日)
- 奥村 晴彦 「Moodleを使ってみよう」(三重大学高等教育創造開発センター、三重大学総合情報処理センター)2008年4月
<http://portal.mie-u.ac.jp/moodletext/moodle.pdf> (2008.9.20 検索)
- 高橋 純 「インターネットを利用した予習・復習の支援」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス紀要』第46号(2008年3月31日)
- 濱岡 美郎 『Moodleを使って授業する：なるほど簡単マニュアル』(海文堂、2008年9月15日)
- 森尾 吉成 「Moodle 使用マニュアル」(MORIO FARM社)2007年10月23日
<http://portal.mie-u.ac.jp/img/manual-morio071023.pdf> (2008.9.20 検索)

(平成20年11月10日受稿,平成21年3月4日受理)